

姚嘉文総統府資政インタビュー

国立台湾大学歴史学研究所博士課程 寺山学
(元日本台湾交流協会台北事務所総務室長)

今回、台湾の民主化運動の指導者の一人として活躍し、民主進歩党発足後には第2代主席を務めた現総統府資政の姚嘉文氏に、台湾の民主化運動の歴史や日本時代に対する見方などについて伺いました。

- ・インタビュー実施日 2026年1月19日
- ・インタビュー実施場所 台湾国家連盟

<姚嘉文・総統府資政略歴>

1938年、彰化県生まれ。国立台湾大学法律学科卒業後、同大学院法学修士課程修了。弁護士資格取得後、1972年にカリフォルニア大学バークレー校へ留学。

1973年、林義雄氏（元民主進歩党主席）らとともに弁護士事務所を開設。この間、政治雑誌『台湾政論』の法律顧問や反対派の政治家である郭雨新氏の選挙における法律顧問を務めるなど、政治活動に参加。

1979年、政治雑誌『美麗島』の幹部に就任。同雑誌への投稿や演説を通じて影響力を発揮したが、同年12月10日に生じた美麗島関係者と治安部隊が衝突した「美麗島事件」により懲役刑。入監中に歴史小説『台湾七色記』を執筆。1987年に釈放。

1987年、民主進歩党（民進党）第2代主席に就任。1992年には立法委員に当選。

2000年、陳水扁総統当選後、総統府資政に就任。

2002年、考試院院長に就任。在任中の2004年には台湾側を代表して山中貞則・日華議員懇談会元会長の告別式に出席。

2016年、蔡英文総統当選後、総統府資政に再就任し、現在に至る。政治団体「台湾国家連盟」の幹部を務めるほか、同氏夫人の周清玉・元彰化県長とともに、彰化市にある台湾語を主題とする博物館「台語文創意園區」を中心に、台湾語復興運動にも従事。



『民主台湾一百年』

——姚資政は、昨2025年、「民主化運動」という視点から、戦前から現在に至る台湾民主化運動の軌跡をまとめた書籍『民主台湾一百年』を出版されました。戦後の民主化運動の指導者の一人とし

て、日本時代を含む100年の歴史を振り返ろうと考えた経緯について教えていただけますか。

姚資政 この本の執筆するきっかけは2023年に行った米国訪問にあります。同年、私は1972年にかつて留学したカリフォルニア州のベイエリア



『民主台湾一百年』の新書発表会
(筆者撮影)

に位置するサンノゼ市で、留学の影響と留学後に従事した民主化運動について、「ベイエリアと共に歩んだ50年」と題した講演を行いました。その内容に触れた米国在住の友人から、講演内容を書籍としてまとめるよう勧められたのです。そこで、台湾の民主化運動の発展について、私自身の経験を軸に執筆を始めました。しかし書き進めるうちに、私が留学から台湾へ戻った後、1975年の蒋介石総統の死去を契機に民主化運動が大きく動いたことは確かであるものの、それ以前の歴史を踏まえずに台湾の民主化運動を語るには無理があると感じるようになりました。とりわけ、台湾の民主化運動の歴史を遡る中で、日本との繋がりを強く意識するようになり、台湾の「民主」の根は日本時代に始まったのだと考えるようになりました。すなわち、日本時代に台湾人留学生が日本で学んだ欧州由来の「民主」という概念、そしてその実践である台湾議会設置請願運動に触れなければ、台湾の民主化運動を総括することはできないと気づいたのです。もちろん、現在の台湾史の研究が、戦前と戦後といった時代区分ごとに進められている状況からも分かるように、異なる時代を一気通貫で分析することには大変な困難が伴います。ただ、それでも私は、この本を通じて、自分自身の経験や既存の研究成果を踏まえ、民主化運動という一つの主題の下、日本時代から現在に至るまでの歴史を語ることの必要性を訴えたかったのです。

——この百年の歴史について、どのような視点から捉えたのでしょうか。

姚資政 私はこの百年間の民主化運動の歴史を8つの段階で捉えました。すなわち、

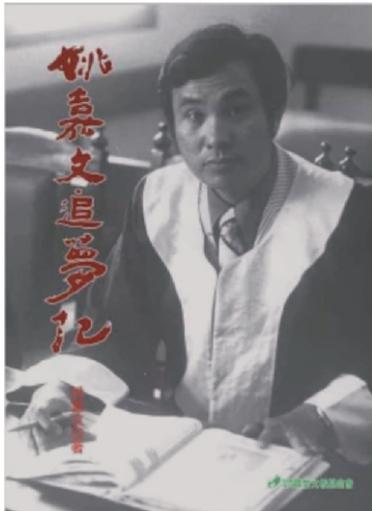
- ①1895年～民主観念の輸入
- ②1921年～民主運動の萌芽
- ③1945年～民主政治の低迷
- ④1951年～反対運動の啓発
- ⑤1971年～主権思想の成熟化
- ⑥1977年～参政運動の勃興
- ⑦1979年～建国運動の始動
- ⑧1987年～民主政治の改革

という流れです。まず、①民主観念の輸入という点では、下関条約締結後に清朝の旧官僚や台湾人が設立した「台湾民主国」において「民主」という言葉が初めて用いられました。これは外来語としての「民主」をそのまま採用したもので、当時の関係者が民主について十分理解していたわけではありません。しかし、「民主」という概念が台湾に持ち込まれた意義は大きいと考えます。

その後、台湾人が自らの手で民主化運動を始めたのは、日本時代の1921年に開始された台湾議会設置請願運動においてでした。この間、当局に対する政治運動は戦後に入っても続きましたが、それが低迷する契機となったのは、主として1947年に生じた二二八事件でした。

運動が低迷する中、戦後の民主化運動にとって重要な啓発となったのが、1951年のサンフランシスコ平和条約において日本が台湾の主権を放棄し、台湾の法的帰属が不明瞭になったことでした。同時に、1971年の国連アルバニア決議（第2758号決議）によって蒋介石政権が国連から追放されたことで、国民党政権の正統性に疑問が投げかけられるようになりました。こうした出来事は、政治運動を展開する際の有力な根拠となったのです。

その後、1977年に選挙不正に憤った民衆が警察署を焼き討ちにした中壠事件は、その後の美麗島運動とともに、台湾人の政治参加を大きく促す契機となりました。さらに、1979年の美麗島事件とその軍事裁判の過程は、民主化運動の主張が一般民衆の間で広く受け入れられるきっかけとな



弁護士時代の姚資政（著書『姚嘉文追夢記』の表紙より）

りました。こうした一連の民主化運動が1987年の戒厳令解除につながり、野党である民進党の勢力拡大、1992年の国会全面改選、1994年の省長及び直轄市長の民選化、1996年の総統直接選挙、そして2000年の政権交代へと続く大きな変革をもたらしました。

——『民主台湾一百年』において、姚資政は台湾の民主化運動に共通する特徴の一つとして「体制内改革」という概念を提起されています。「体制内改革」とは具体的にどのようなものなのでしょうか。

姚資政 他の権威主義国家と比べて台湾に特徴的なのは、台湾では一貫して選挙が実施されてきた点です。日本時代の1935年に最初の地方選挙が実施されて以来、戦後の白色テロと呼ばれる政治的弾圧が続いた時代であっても、選挙そのものは行われ続けました。この間、選挙期間は、「言論の自由のパッケージ」と呼ばれ、10日間の選挙期間中だけは一定の言論の自由が認められていました。当時、立法院や国民代表大会は「万年国会」と呼ばれるほど非改選議員が多数を占めており、新たに選挙で選ばれる議席はごくわずかでした。議会の運営や議決に与える影響は極めて限定的でしたが、それでも選挙期間中に言論活動が可能になるという点で、各選挙は大きな意義を持っていました。そのため、武力行使といった革命的手法を採らなくても、「体制内」の手法、すなわ

ち選挙を通じて、漸進的に私たちの主張や目標を浸透させることが可能だったのです。

当時、国民党政権が限定的とはいえ選挙を認めていた背景には、当時の国際情勢の中で、米国の支持を必要としており、そのためには「選挙が自由に行われている」ことを対外的に示す必要があったことが大きく影響していました。さらに、米国や日本には台湾独立運動家も多く活動しており、国民党政権は海外から常に厳しい視線にさらされていたことも重要な要因でした。

もう一つ忘れてはならない要素として、日本時代の政治運動の影響があります。日本時代には地方選挙が実施され、台湾人によって台湾議会設置請願運動も行われていました。こうした経緯があったため、国民党政権としても、前統治者との比較において正統性を確保する必要があり、地方選挙を継続する必要があったのです。さらに、日本時代に追求された台湾議会に相当する省議会の設置も認められ、当初は間接選挙でしたが、その後は直接選挙によって省議員を選出できるようになりました。

このようにして見ると、民主化運動によって、日本時代には地方選挙の一部が開放され、戦後の運動を通じて省議会が開放され、さらに民主化以降にはそれが国レベルの立法院や国民代表大会へと広がっていったという順序が確認できます。つまり民主化運動によって、選挙で選出される議会のレベルが、地方から国レベルへと段階的に拡大していく過程が見取れるのです。だからこそ、台湾は他国のように革命的な手法で対抗するのではなく、議会を通じて台湾人の権利を確保するとの基本方針を百年にわたり維持してきたのです。そして、その方針は実際に成果を上げてきたと言えるでしょう。

台湾の政治運動と日本との関係

——台湾の民主化運動において、日本時代はどのような位置づけにあったと考えますか。

姚資政 日本時代の台湾総督府が、台湾人が求めた台湾議会の設置を拒否し続けたことは、蒋介石

政権が国会（立法院、国民代表大会）の全面改選を拒否し続けたことと、その目的や手段の点において、類似しています。いずれも独裁的な統治体制の維持を主眼としていました。この点、日本時代の政治運動の中で、戦後の民主化運動に直接影響を与えたのは、やはり前述の台湾議会設置請願運動であったと思います。日本の帝国議会への請願活動を通じて、台湾議会の設立を目指したこの運動は、直接その成果を得ることはできなかったものの、台湾社会に大きな影響をもたらしました。具体的には、先ほど申上げた「実現可能な体制内の政治闘争」という政治運動の指針を台湾人に対して示したことです。

台湾の民主化運動は、1921年に始まった台湾議会設置請願運動から戦後の国会全面改選運動へと引き継がれ、71年を経て、1992年になってようやく国会（立法院）の全面改選が実現しました。ここに至るまでには、多くの台湾人の知恵と労力、そして犠牲が積み重ねられてきました。

——日本時代に対する台湾人の見方についてはどのように捉えていますか。

姚資政 私の当時の感覚からすれば、同時代を生きた多くの台湾人は「異族」である日本人の統治について快く受け止めていませんでした。とりわけ、最も身近に接する日本人である警察官は、多くの台湾人にとって嫌悪の対象でした。私の父は日本時代から、私に日本の歌は歌わないよう、また日本語を学ばないようにと教育していました。そのような状況であったため、日本の敗戦が伝えられたとき、私の周囲の大人たちがとても喜んでいたので印象に残っています。私はまだ幼く、その意味をよく理解してはいませんが、父が喜んでいたことはよく覚えています。

台湾社会においてこうした日本に対する評価が大きく変わるきっかけとなったのは、やはり二二八事件だだと思います。戦後、台湾大学文学院長を務めた林茂生氏（※戦後の民主化運動に従事し、二二八事件で失踪した犠牲者の一人）の息子が、生前の林茂生氏の言葉として私に教えてくれたのは、「日本人が嫌いだったので、祖国

が来てとても喜んだが、まさか祖国が日本よりも悪いとは思わなかった」というものでした。こうした感覚は、当時の多くの人々に共通していたのではないかと思います。日本時代には、司法が一応独立しており、警察官の汚職も少なかったのに対し、国民党時代になると、司法の独立は担保されず、汚職がはびこるようになりました。また、日本時代には台湾文化協会、台湾民衆党など一定の結社の自由が存在しましたが、戦後にはそうした自由は失われました。こうした点について、私は日本時代に台湾文化協会に参加していた政治運動家の先輩方から聞かされました。さらに、戦前から戦後にかけて政治運動に従事した石錫勲氏（※戦前は台湾文化協会などで活動し、戦後は彰化県を中心に政治運動を展開した人物）は、いずれの時代にも投獄されましたが、日本時代には数カ月の禁錮刑であったのに対し、戦後は7年の禁錮刑を科されたことも、両時代の違いを示すものでした。

他方で、公平に見れば、国民党時代の方が日本時代よりも良かった点もあります。例えば、徴兵の任期について、日本時代には戦時下であったこともあり明確に定められていませんでしたが、国民党政権下では、一定の任期が設けられていました。また、地方選挙についても、日本時代は地方議会の一部議員の選挙に限られていたのに対し、戦後まもなく県長など執行者も選挙で直接選出できるようになりました。

——姚資政自身は、日本時代についてはどのような印象がありますか。

姚資政 前述のとおり、父からは日本について悪い面を聞かされてきましたが、私自身は日本人と触れ合う機会がほとんどなかったこともあり、日本人に対して特に嫌な感情を持ったことはありません。日本人の警察官が台湾人を殴るような光景を目にしたことも少なかったです。日本時代を振り返って最も印象に残っているのは、当時、定期的に派出所で飲まされたマラリアの薬のことで、三十分ほど歩いて最寄りの派出所に着くと、驚くことに、禪姿の警察官がいました。その警察

官から「名前！」と言われて、名乗ると、マラリアの薬と水が渡され、その場で服用させられました。その警察官は、私が薬を残さず飲み干すまで、じっと凝視していました。マラリアを予防するため、皆に確実に薬を飲ませるという点では、良い事であったと思います。

日本時代の政治運動家の影響

——姚資政は戦後の民主化運動を主導するにあたり、日本時代に政治運動に携わった政治運動家から多くの影響を受けたと聞きましたが、具体的などのような示唆を得たのでしょうか。

姚資政 日本時代に政治運動を行った先輩たちの経験から、非常に重要な示唆を得ました。例えば、日本時代に台湾議会設置請願運動を主導した一人である呉三連氏（※戦後、台北市長や台湾省議会議員、『自立晩報』社長などを歴任）は、政治運動の基本的な考えとして「(政治運動とは) ロウソクに火をともしるのであって、花火を打ち上げることではない」と教えてくれました。つまり、花火のように一過性で派手な運動ではなく、たとえ目立たなくても長期的な視点で取り組むことの大切さを説いたのです。また、呉三連氏だけでなく、前述の石錫勳氏も「政治運動を行うことは危険で、捕まるかもしれない。しかし、誰かが必ずやらなければならないことだ。それは自殺行為でもあるが、やる以上は皆で支援する。但し、過激な手段に訴えてはならない」と述べ、私の政治活動を支持してくれました。

呉三連氏や石錫勳氏から受けた助言の影響は大きく、私はその教えを踏まえ、これまでの政治運動において過激な行動は避け、一貫して言論を通じた活動を重視してきました。すなわち、私たちが取るべき手法は体制内での言論を通じた政治運動であり、韓国やアイルランドのように実力行使によって体制外から変革を迫る手法は避けてきたのです。この方針は、台湾議会設置請願運動から美麗島運動に至るまで、一貫して受け継がれてきた台湾の民主化運動の基本姿勢であると思います。その意味で、日本時代の政治運動家から戦後

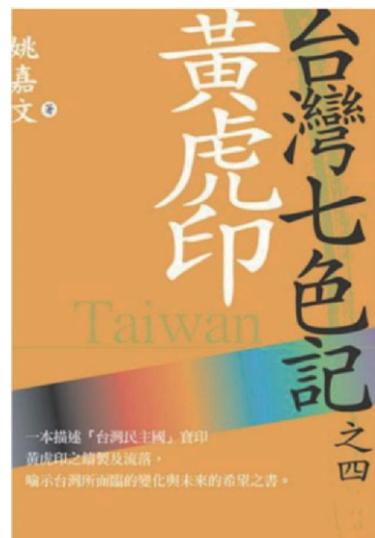
の運動家へと受け継がれてきた思想的意義は非常に大きいと言えるでしょう。

もちろん、こうした政治的姿勢には批判の声もありました。政治運動の過程では、「国民党を恐れている」、「口先だけだ」といった批判を受けることもありました。また、海外の台湾独立運動の一部では、武器を用いた訓練が行われていた例もあります。実際、当時台湾省主席であった謝東閔氏に対する郵便小包爆弾事件や、訪米中の蔣経国氏に対する暗殺未遂事件も発生しました。しかし、私はこうした手法が台湾の民主化運動にとって最適であるとは思いませんでした。私たちは、日本時代の政治運動同様に、言論を通じた大衆運動の力を信じていたのです。

姚資政の政治運動参加の契機

——姚資政は1970年代から党外勢力（※国民党に対する反対勢力）の指導者の一人として活躍されましたが、党外の政治運動に参加するきっかけについて教えてください。

姚資政 私は大学で法学を学んでいたことから、学生時代から、法学の観点から台湾の民主化について強い関心を抱いていました。当時、特に注目していたのは西ドイツの基本法です。西ドイツは、東ドイツも自国の主権の範囲に含まれるという前提を維持しつつ、西ドイツで選出された議員が東



台湾民主国について描いた小説『台湾七色記：黄虎印』

ドイツの人民に代わって権力を行使する仕組みを採っていました。この点は、中国全体を統治するという建前のもと、外省人による万年国会体制が正当化されていた台湾の状況とは大きく異なります。私は、西ドイツのこの制度が、政府の建前を保ちながら台湾で民主化を進める際の参考になると考えていました。

しかし、この考えが大きく変わるきっかけとなったのが、1972年の米国留学です。留学中に台湾に関する多様な議論に触れる中で、そもそも「全中国を統治する」という建前に従う必要はなく、台湾を中国とは切り離し、台湾本位でとらえるべきだと考えるようになりました。この考えを内に秘めて台湾に戻った後は、弁護士として活動しながら、政治運動にも参加するようになりました。

また、この考えを公にしたものの一つに、後述する美麗島事件の軍事裁判後に、受難者4名の連名で発出した声明があります。この声明の中では「中華民族は歴史上一度ならず、理想の違いによって分離建国を経験してきました」と訴えました。当時の政治状況を踏まえた婉曲的な表現ではありますが、これは正に台湾本位の考えを対外的に示したものです。

また、台湾本位で物事を考えるうえで特に重要になるのが歴史です。当時、学校教育では中国史が教えられており、台湾人の多くが台湾史については知らない状況にありました。そのため、私は美麗島事件で投獄された8年間に、台湾の歴史を研究しながら、獄中で台湾史を主題とした小説を執筆しました。それが後に出版された『台湾七色記』です。同書では、たとえば台湾民主国の成り立ちなど、台湾史の史実に注目し、その意義を小説という形で表現しました。

「美麗島事件」に対する評価

——1979年には雑誌『美麗島』を創刊し、組織としての政治運動に従事されましたが、台湾の政治史における美麗島運動の意義についてどのように捉えていますか。

姚資政 1979年に雑誌『美麗島』を創刊し、同雑誌社を基盤とした政治運動を展開しました。この美麗島運動は、それまでの党外勢力が行ってきた反対運動が、参政運動へと発展する転換点であったと思います。すなわち、それ以前の運動が国民党政権の問題を指摘し、反対を表明することに重きが置かれていたのに対し、美麗島運動では私たち自身のマニフェストを提示し、将来のビジョンを具体的に示した点に大きな違いがありました。また美麗島運動は、それまで散発的であった党外の政治運動を組織化し、演説を通じた啓蒙活動の本格的な展開という意味でも画期的でした。

前述したとおり、私は一貫して「体制内改革」を重視しており、暴力による運動には反対の立場でした。しかし、1979年12月10日に高雄で発生したデモ隊と治安部隊との衝突、いわゆる「美麗島（高雄）事件」によって、私は暴力行為を理由に逮捕される事態となりました。同日の美麗島関係者による行進は、世界人権の日にあわせた平和的なデモ活動でした。ところが、戒厳令下で政治的弾圧を行っていた警備総部の内通者がデモ隊に紛れ込み、扇動行為を行った結果、治安部隊との衝突が引き起こされてしまったのです。まさに、私たちが意図しない形で暴力行為が生じてしまったと言えます。

——美麗島事件及びその後の軍事裁判の過程は、戦後の台湾の民主化運動にどのような影響があったと考えていますか。

姚資政 私たちは政権転覆罪で起訴されましたが、これは荒唐無稽なものでした。裁判の初日には、事件で使われたとされる棍棒や石が証拠として並べられました。しかし私が「これらの道具で本当に政権転覆できると思うのか」と問いただしたところ、翌日からそれらは並べられなくなりました。彼ら自身も、自分たちの論理の矛盾に気づいたのだと思います。また、裁判の過程で、同じく逮捕された施明德氏が「選挙で政権を替えることは合法ではないのか」と発言しましたが、この言葉はまさに本質を突くものでした。

この美麗島事件の裁判がもたらした最大の効果は、台湾の人々が裁判の過程を通じて、私たちの行動が「大それたものではない」ことを理解した点にあります。それまでの国民党政権の喧伝によって、私たちはテロ集団のように扱われ、多くの台湾人は私たちの家に銃や刃物があると信じていました。しかし、裁判の過程でそうしたものは存在しないことが明らかになりました。また、国民党政権の喧伝によって、私たちはしばしば「中共と同じ道を歩く者」と見なされてきましたが、家宅捜索などでも中共との関係を示す証拠は一切発見されませんでした。その結果、一般の人々は、私たちと中国共産党の間には何の関係もないことを理解するようになったのです。こうした疑念が晴れたことにより、その後、多くの台湾人が私たちの主張する国会の全面改選、戒厳令の解除といった要求に、素直に耳を傾けてくれるようになりました。

一般大衆への宣伝効果という点では、日本時代に台湾議会設置請願運動に関連して台湾当局によって起訴された、1923年の「治安警察法事件(治警事件)」と通じるものがあると思います。当時も、裁判の過程を通じて、多くの台湾人が被告とされた台湾人運動家の主張に触れ、台湾議会運動への理解を新たにする契機となりました。

民進党と大衆運動の関係

——姚資政は、民進党主席時代から現在に至るまで一貫して議会外での大衆運動（中国語：群衆運動）を重視されてきました。姚資政が大衆運動を重視される理由について教えてください。

姚資政 私は大衆とともに政治を進めるという意味で、民進党がかつて主導してきた大衆運動には依然として重要な意義があると考えています。ところが現在の民進党の一部議員の間では、議会での議論だけを優先し、大衆運動については「家を守る者は騒ぎを起こさない(中国語：當家不鬧事)」と理由をつけて避ける傾向が強いように見受けられます。こうした姿勢は、民進党の核となる価値を自ら手放すようなものだと私は思います。民進

党の強みは大衆との繋がりにあり、この点は与党にあっても忘れてはならないはずです。ひまわり学生運動や昨年のリコール運動など、近年の大衆運動はいずれも民進党以外の政治勢力が主導したものであり、民進党はすでに大衆運動を主導する能力を失いつつあるように感じます。この点、李登輝総統が政権与党でありながら大衆運動を巧みに活用し、自らが望む改革の原動力としてきた姿勢とは対照的に映ります。

頼清徳政権と過去の民進党政権の比較

——姚資政は、陳水扁政権時代は考試院院長を、蔡英文政権及び現在の頼清徳政権では総統府資政を務められるなど、民進党歴代政権の動きを第一線で見てこられました。これら三つの政権には、それぞれどのような特徴があったと感じますか。

姚資政 陳水扁政権時代は、民進党自体がまだ執政に慣れていない状況であったことから、外国との関係や人事の面でさまざまな難しさがありました。これに対し蔡英文政権では、蔡英文氏自身が、海外留学の経験や長年にわたり外国との交渉に携わってきた経歴を有していたことから、米国をはじめ各国との間で非常な良好な関係を築くことができたと思います。この点、現在の頼清徳政権も、引き続き米国や日本など各国との良好な関係を維持しています。その一方、中国の浸透工作が激しさを増していること、および立法院で民進党が少数与党であることから、頼政権は前政権に比べ、より難しいかじ取りを迫られています。蔡前総統と頼総統では、個性の面でも若干の違いもあるように感じます。蔡前総統は広く意見を集約して、それを吟味しながら政策の方向性を定めるとの姿勢であったのに対し、頼総統は核となる自身の強い信念を持っており、力強いリーダーシップを通じて政策を前進させる手法を採っているように感じます。台湾の主体性をめぐる頼総統の言動は、正にその表れであり、これらは台湾にとって非常に重要なことだと思います。

(編集：寺山学)



取材中の一コマ